名大の時間 613

〝名寄スピリッツ〟を繋ぐ

20年ほど前、名寄短大を巣立った一人の卒業生がいました。当時、私の同僚教員が学生によく口にしていたのが、〝名寄スピリッツ〟という言葉です。市立名寄短期大学児童学科の実務家教員として初めて教壇に立ったばかりの私にとっても、その言葉と学科全体での教育実践は、胸を揺さぶるほど刺激的でした。

その卒業生が結婚して仕事を離れ、嫁いでいった隣家に、彼女を「お姉ちゃん」と慕っていた一人の少女がいました。卒業生が語る名寄での学び、仲間との時間、地域との関わり。さらに、自身の妹が同じ名寄短大を卒業したこと、そして、子育てをしながらの保育への想い。その一つひとつが、少女にとってまだ見ぬ大学への憧れとなり、やがて「保育士になりたい」「名寄市立大学を目指したい」という確かな志へと育っていったのです。

2024年4月、私が再び名寄に戻ってきた時のこと。社会保育学科恒例の「新入生宿泊オリエンテーション」に招かれた際、一人の2年生リーダーが挨拶に来てくれました。その学生こそ「お姉ちゃん」の話を聞いて育った若者でした。

彼女は、卒業生からの私へのメッセージ、そして自らリーダーを務めたいと願い、それが叶った喜び、名寄に来てよかったと、一気に語ってくれたのです。時を経て、彼女は名寄の地に立ち、かつて聞いた〝名寄スピリッツ〟を今度は自らの手で受け継いでいたのです。

保健福祉学部四学科に共通する学びの基本を、私は「ヒューマン・サービスの精神」だと考えています。それは、「ひと」に寄り添い、地域に根ざし、誰かの人生を支えることを誇りとする姿勢であり、そして、その根底には、名寄での暮らしと学びが充実したものであることが欠かせません。

名寄市立大学は四大化して20年目を迎え、来年4月、公立大学法人として新たな一歩を踏み出す準備を進めています。

地域に根ざしながら、より自律的で未来志向の大学へ。その変革の節目に、かつての〝名寄スピリッツ〟を受け継ぐ学生が加わっていることに、私は偶然以上の意味を感じています。

名寄市立大学学長　家村昭矩